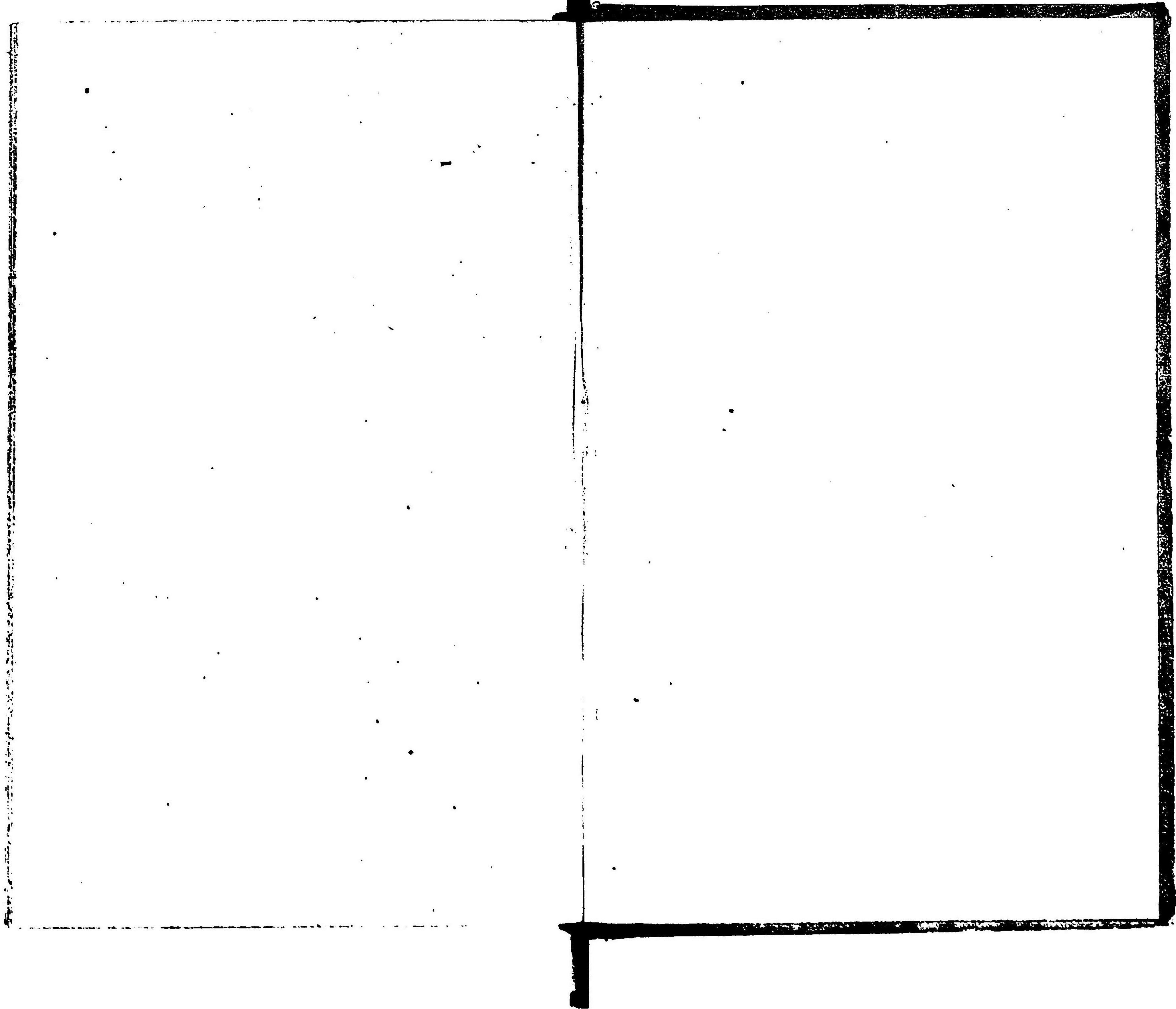


118  
5  
208

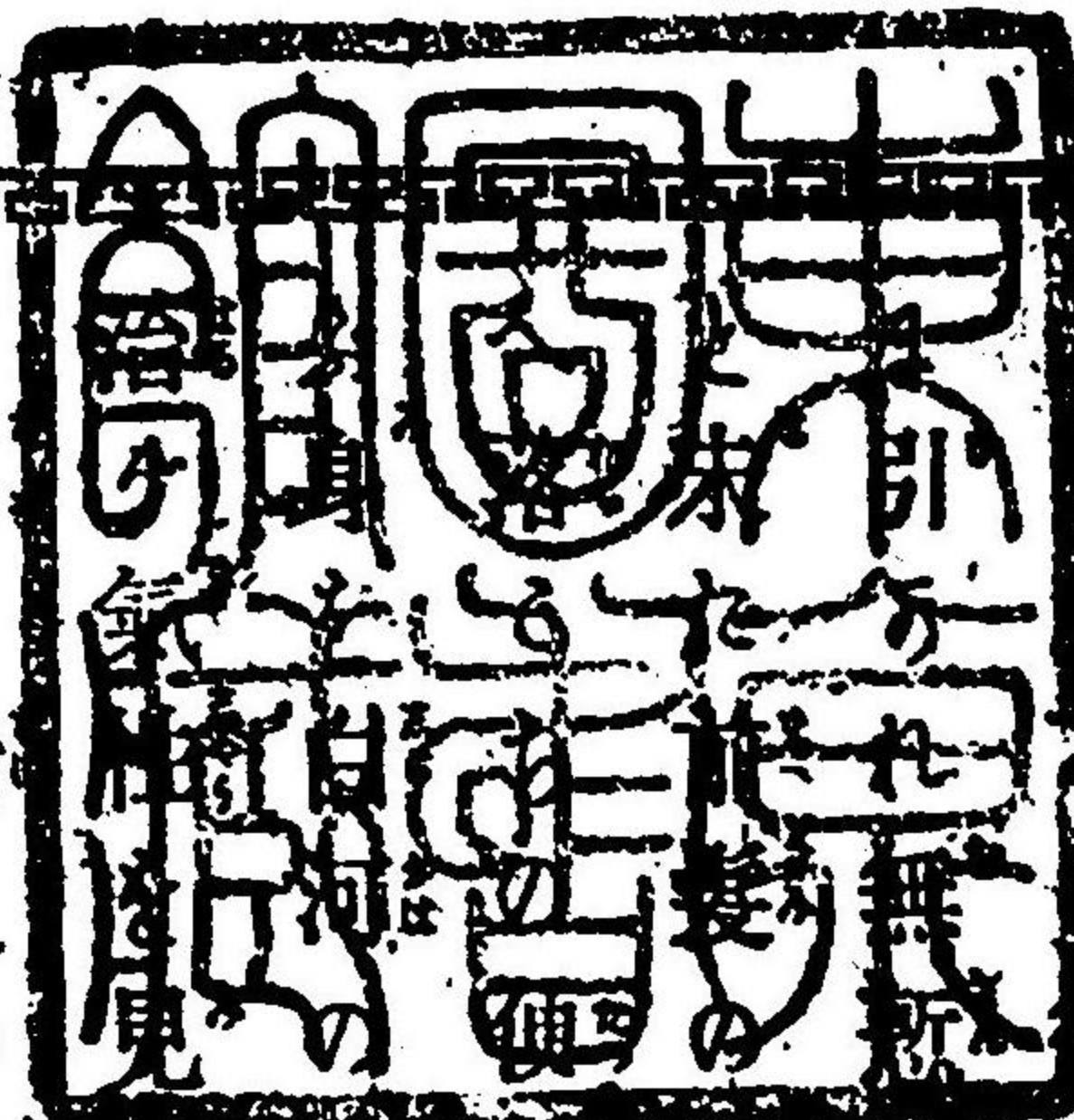
猶根權現農歌  
全





明治二十年二月十七日内務省交付しる

箱根権現覺醒討緒言



大尉殺下の御内にて鬼と稱れし勘平もお勝が戀の情  
の毒手お敢無き最期父が無念を晴さん  
初五郎が力と頼む十次兵衛の惜や深底  
を失ふ飯沼が旅寐の難に奥州路世を忍  
九十九が娘の切ある望も一念變せぬ元  
貫く新左衛門押付わさの聲引出お與へ  
る刀の覺えの業物坐行車の天運循環箱根に於て圖せ  
も松並主計が義心は依り恨み重る幸助を討て本意を  
達せし荒人神の名にと負ふ曾我殿原に劣ぬ功天晴



奇代の孝子なりと好事忽ち門をいで以前勝る出世  
と爲し汝に出で汝返る是を勸善懲惡の報ひ依  
りて究達の結果を示そ一美譚舊きと茲に新しく目先  
と變て梓の上せ婦幼の爲に端書して此一丁と塞ぐと  
云爾

賣ると慥に目利を定めた板元の上田屋が  
索に依て

柳葉亭繁彦

特11  
421

箱根權現燈仇討

○秀吉公大坂城を築かせ給ふ事 并顯如上人石材と献上せる事

刃と撫し惡み視て曰く彼笑んぞ敢て我に當らんやと是匹夫の勇一人に敵せる者なり刃の一  
人の敵學ぶ足らず願ひく万人の敵と學ばんと云ふ是万人に敵せるなり然バ漢の高祖沛  
より起り馬上より三尺の刃を提げて王位を昇り四百年の基を開くと是至極の大勇と云ふ  
かなれ爰に豊臣秀吉公の天下麻の如く乱れ人心絲の如く縫れ未だ鹿の誰が手は浴ると云と  
知ざるに際し命世の才を以て四海を併呑し世々青天白日の太平を治め給ひ上下鼓腹して万  
歳を唱ふる中にも怡居て乱と忘れざるの格言を守らせ一の要地と見立て堅城と築べしと  
思召そ其折柄に六條本願寺十一世の顯如上人太閤へ勸め進らせけるに居居城と定めさせ  
と大坂の地み比ふ處之なく抑も大坂の西三十三ヶ國の都會として四民輻輳の所といひ  
西の滄海の固めあり東の關りの險あつて要害も亦甚はたよろしくいへば爰に居居城と  
築かせられんと實に子孫繁榮の基と存じいなり幾重も大坂に居居城しかるべくいとな

ければ太閤も點頭せられ何様大坂の故信長公も會て浮居城居させられんとて明智光秀も岡  
 竿を打せられしともあり然バ和僧のやさるゝ如く大阪も居城と築くべしと有ければ上人君  
 彌よ大阪も浮居城築かせ給ふとならば愚僧も應分の浮手傳仕つるべしとア又殿下否く夫  
 の浮無用城を築くとい勿々容易からぬとて先第一の石材なり而して其入費も夥多しき處  
 浮身出家の儀なれば右様のと浮存じも無て斯曰ふ成んが先其儀は浮無用たるべしと仰らる  
 と上人飯令何程石材浮入用ある共必らず調へ差上ん是非も愚僧へ仰せ付られ度とア又殿  
 下然らば和僧の心も任せやさんと有けるも上人心得いとやて退散と夫より上人諸國の末  
 寺へ觸を廻され此度太閤秀吉公大阪表も浮城と築かせ給ふに依て石材一式も浮手傳致し  
 へば遠國隔々も至る迄門徒たるべき者早々大阪表へ石材運ぶべしと有ければ諸國の門徒  
 本山顯如上人よりの浮觸なりとて各々深山險阻の嫌ひなく自身行て夥多の石と堀取船も積  
 込で日々も大阪表へ運びしかば僅かの内も早浮城普請の餘る程石も積上たり秀吉公此由  
 奉行の者より聞し召れ流石顯如上人なる哉是まで叡山南都の法師等處々の軍さよ加勢せし

と有ども顯如上人の骨折斯の如くなれば後日我天下と取共、跡の者此城も弓を響と有べか  
 らず實も門徒の威勢の凄まじくも又殊勝なる者哉と大いお悦ばせられ夫より掛の役人、仰  
 せ付られんとて先奉行の片桐市正且元小頭、飯沼勘平加藤幸助等と定められ其外石工  
 番匠の諸職人を幾万人となく集られて彌よ大阪城浮普請とぞ始めさせける然おより太閤問  
 竿の打様など委細片桐へ浮差圖も及ばれ且元其如くお繩張等、始めし處圖らるも先年光秀  
 の經營せし杭木お堀當りしかば且元實も名將の深慮の萬事斯の如く符合せし者かなと獨り  
 感嘆なして居たりしとかや

○浮城普請の諸役人水邊まで酒宴の事 并飯沼勘平勝女と契る事

秀吉公の仁政も因て治まる御代の浮普請なれば諸工力と盡して勵むける故段々と工事抄取  
 り石垣も露出来しけるも時しも七月の孟蘭盆なれば暑の強きも堪かね諸役人等皆淀川の邊  
 へ打集ひ酒肴と調へて納涼の宴を開き或の語り或の笑ひ暫の間、鳴も止ざる愉快々皆  
 々意外の大酔となし前後も不覺お興じ入ける其内お夜も良更て波間お映る月影いとど清

けく見ゆし折しも加藤幸助飯沼勘平の兩人思ひを其座より臥し轉び眩々枕は假寐とぞる其な  
 しし寐入たる其間も有す早人々の歸りしかば幸助此物音より目と醒し勘平の能寐入し体と見  
 て儲々強ひ醉様な幸起して一緒に連行んや勘平大人より起給ひねと一聲掛し不圖思ひ  
 返し否々此人を平常より思ひしと思ふ人なれば假令軍功あるもせよ太閤の御意入と有  
 て祿も二千石と頂戴し人々として思ひを兎角威張散して居ると奇  
 怪なり我としても豈無手柄なしと  
 云ふも非ず然るも我の祿も彼  
 ん及び老儘も千二百石もて在と  
 思へば口惜き次第なりヨシ  
 彼寐入て居るも幸ひ置去かし  
 て歸るべし然る時の彼必ら夜



明までも目を覺さず普請場へ赴  
 くとも夫が爲め延引し奉行片桐  
 殿の手前も少しの不首尾と相成  
 べし是好き報怨なり然じやく  
 と一人點首遂に同役の勘平と打  
 捨己れ一人假屋を指てぞ立歸り  
 ける跡より勘平只一人暫し寝入  
 て居たりしが不圖目と覺し四邊  
 を見るお何時の間にかの幸助と始め皆々の者居らざれば大い驚き早速自分も歸らんとし  
 て出掛し處那邊より有し一發の薄動さしかば思はず是と見て有處も不思議やな年も二八か二  
 九からぬ最と美しき少艾の平ぐけ帯の其まゝもて如何も臥床と恐び出意中の人と待たぬ如  
 さの風情をなし懐中より小硯出して何やら薄葉へ書記一程遠からの向ふの川へ流しければ



勤平心と思ふ様之正しく狐狸の術ならん我今此處より一人酔臥て在り付込て誰かさんどの仕たる成べしいでや目も物見せて呉なんど少艾の側らへ突と立寄汝れ何者なれば斯る夜更み此處へ来る定めて狐狸の類ひならん早く正体と現はさばよし然るく打殺して呉んきと天地と響く大喝一聲怒鳴り付れば少女恐れて物とも得いのを戦き怖れて逃廻ると勤平扱まそ己れ遁しひせじと刀と抜く付廻せば少女今の足も進まず踏と傍へ倒れけるよど勤平驚き扱ひ狐狸よてい無りしや近頃以て氣の毒のと爲たりと急ぎ水とバ口お合ませ種々介抱なしけるよ暫く過て漸々人心地付しかば勤平心静は身如何なる者よて在るや氣とバ借お持れよと云ふ少女妾と更々怪しき者ならん是より向ふよ當りたる多田野と云る其所よ住かも然まで賤からぬ長者の娘めて名とバ勝女とや頃しも去年七月の今日お慈母と失なひ便り少なの身と成て漸々親族の者の世話も成り憂き月日と送りし程よ今宵よと父母の事と思ひ出し寢所と抜出今いしも孟蘭盆の功德も亡き慈母へ手向の爲念佛記して此川水へ流しひなり便り無身の遣る瀬なき惘然の者と思し召淨許し下され給へかしと語れば勤平

始終と打聞き扱々神明なる心かな貴女斯孝心と有からぬ我兎も角も能きよ計らい得させやさん我の則ち浮城普請の役人飯沼勤平と云者なり願て秀吉殿下此所よ浮居城し給へば我々も亦此所へ住居せん然らば其時貴女を召出して吾左右の差置ん先づ夫までいと云乍ら膝の思案の外話しお飽ぬ妹背と結びける斯て夜も追々よ更け渡れば又の逢瀬と契りつゝ其夜の其儘別れけれ共飯沼勤平今年三十三歳ふて而も十三歳も成る初五郎といふ体もあり其上妻もまご裏若さおは是より後の毎夜くよ出逢し是ぞ身の大害とい成よける

○加藤幸助勝女よ横懸幕の事 并 加藤幸助飯沼勤平を欺し討よとる事

扱も飯沼勤平夜毎お假屋を出て何時も深更まで歸り來らざれば幸助之を不思議お思ひ或夜窺かみ勤平の出行跡と付覘ひ淀川の流み添て下り行處一人の少艾西の方より川邊傳ひお此方へ來り勤平と出合て然も嬉しげお染を物語りとるお幸助扱こそと思ひ遠くより其少艾と見遣けるよ花の顔せ月の眉實よ絶世の美人よして衣通姫小野小町も斯やあらんと思はれければ暫時よみ見取て在しお見付られてい如何なりと傍の薄よ身と隠し聞耳立て居たりし



内は勘平お勝の兩人右と左へ分れしかば幸助熱々お勝と羨ましく思ひ何卒手段と運らして  
 彼女を我手入人んものと心お光と煩惱の犬の追とも立去せ然れど良き思案も出さればよし  
 く翌夕まると兩人の別れ歸る其處と女と捕へて口説ん者と思ひ定めて先其夜の假屋を指  
 てど歸りける斯て翌晩幸助早くも身支度となし又此處へ來りて見れば勘平既來り居て暫  
 く彼の少女と相待居たるは今宵の如何しけん待と暮せど彼の少女影だも見ぬねハ幸助も氣  
 ばかり焦ち居たる折柄西の方よりやつと來れば大い悦び容子何よと見て在る勘平少女ふ  
 打向ひ何故今宵の遅かりしと問はば少女今宵の家内の者早ふ寐せして人目の關は遮られ夫の  
 る斯様は遅くなりし定し君の待待わびと心の彌狂は選れ共外と淋なく苦しき心を堪へ居  
 必き悪く思召そなと言ふ其言葉の終らぬは勘平ひしし抱き付き暫し談話も絶たりける幸助  
 の此体と見て彌戀慕の心堪へ難く現とぬかして見居たる處は勘平お勝お別れハ論ハ夜明  
 るハ人も知べしハ諸共歸すさん疾々と勸むる言葉はお勝も是非なく立去しかば勘平も  
 假屋と急で歸りける然程お幸助ハ少女の後と暮し行か頼て近付屋とかけ我ハ太閤秀吉公の

家來加藤幸助と云者なり今宵川狩をして今歸る處思はず貴女は邂逅て花顔柳姿も氣も魂ひ  
 も身も添せ可憐假の情有れかしと抱き付しとお勝ハ手早く振放し妾ハ母の病氣も因り本願  
 と願はん其爲は神詣でして只今歸る所なれば何卒許容してたび給へといへ共幸助いつかな  
 聞ず欺り給ふと勿れ神詣でとるならば何故寝衣の儘まで出られしを察とるは恐ひ逢ふ戀  
 人や有ん疾々言ねと責付しお勝不然さやうのとい夢も存せせ全く母の病氣の爲神詣で  
 と致せしなり其處退て許容されよと云ふ幸助聲荒らげ貴女然様は陳ずる共其戀人の我よく  
 知れり欺き給ふは淺蕪なれ此處より外への道まじ是非とも望みと遠んすとして既ハ斯よと  
 見ぬければお勝ハ所詮通れぬ場との思ひけれ共何と加して此場の危急と逃れん者として成  
 程は推量の通りおのいへ共妾固より其人を好みてのとお非を義理は通られ餘儀なく隨ひ  
 あり然る間其人の手さへ切て妨げお爲と者いぬねハ貴郎は従ひいとして何苦しからぬ儀は  
 へど其人の居る内の必情も隨ひ難し欺りのやさすアハ可愛の主よなう何卒其内能も返  
 事と云捨しまし足と早めて遁出しけるは幸助元來女子は逢ふてハ正体も無ら程の者ある

故偽らるゝとの露しらせ今女の言ふての勘平さへ無バ我も随ひんと必定なり幸ひ我未だの妻も無しよし然バ勘平ふ出逢ひ眞劍の勝負して女と早く我手入んと思ひしのが又思ひ返し否々彼の手の内勝れし者なり容易く勝負しての叶ふまじ夫よりの彼女と素ひ取り何國へ成とも立退んまど好かるべし然ながら我今此處と立退バ母の難儀何許ならん夫も又恐びざるなり杯と種々考へしのが屹度心と定め所詮欺し討して本望遂るゝの如ざるなり明の晩とバ過そまじ然なりと獨り點頭爰は害心と生せしは是も計じく身を亡はと種との成ふけれ實もや人若き時の誠しむると色お在と幸助の前後の弁へも有やなく僅か一人の勝女が爲ふ曲れる心と爰は起し遂は誠めと打破り殘忍所業及ばんと爲ると淺穢くも又恐ろしけれ斯て其翌日の幸助宵の中より身支度と調へ豫ての場所へ赴きて勘平の來ると今や遅しと待掛たるも神ならぬ身の是非もなく勘平斯との夢も知す例の如く涼るるがら團扇杯使て淀川の流れ清きと打見遣ふらりくと此方と指て來る處お後の方より誰やらん足踏とるよと思ふ間もなく一刀の秋水閃めくや否や肩先目掛けて大袈裟掛又切付しよぞ勘平是のど身を聞く

又早四五寸許り切込れたり勘平振返り見てコハ幸助己れ何の意趣有て欺し討とバ掛たるぞ何故尋常の勝負せざる卑怯さ汝の振舞かなど云様此方よりも切付しが然ども肩先の重傷又腕利す其内一の太刀と切掛られ流石の勘平も既は仆れんと爲けるが必死を極め再び太刀と合せつゝ一上一下と火花と散して切結ぶ斯る處へお勝何心なく來とし處今此体なると見て大いよ驚き如何のせんと思へ共小刀一本も手は持されバ何と爲べき様もなく只途方よ暮て居たりし内透は勘平切伏られて其場へドツと仆れたりお勝の口惜さ限りなく我と忘れて幸助が腕目掛けて噛付しよ幸助お勝と小脇は抱返と見付られての大事なりとて勘平の絶息刀とも刺す只一目散は何處ともなく落行ける

○飯沼勘平遺言の事 井子初五郎復讐と望む事

此去と忽ち其筋へ聞ゆしかバ翌日檢視として生松五郎兵衛桂万兵衛と云る兩人此處へ來り切伏られし者と見るお飯沼勘平數ヶ所の傷を負て臥居ければ大いよ驚き然せ未だ思少し有ければ其儘戸板お乘て奉行片桐の前へ差出したる處市正自身は介抱して仔細と尋るお勘

平眼と見開き苦し氣なる聲を出し某し夜前淀川の邊りへ涼み入りし處後より何者とも知れ老肩先へ切付しと困り振顧り見れば加藤幸助みては何の意趣あて斯の如くなるやと尋ねければ其何とも答へず然るに困り某しも幸助も渡り合左の耳より肩へ懸て切付しあわれ此上の片桐殿の傍執成を禁り悴みては今年十三歳なる初五郎も懲り復させ給ひらば武士道も相立之は過たるは思ふれ無は是ぞ今生の願ひあてはと述ければ市正委細と打聞給ひ其儀の少しも氣遣ひ給ふな我主君も宜敷願ひ得させしと有しかば勘平完爾と打笑ひ今も始めの君の傍芳志辱け無くも存するなれ早々思ひ置といはせ此儀許り願ひなりと云て十三と一期とあし歸らぬ旅もど赴きける斯て市正太閤の傍前へ出此由委細言上も及びし處太閤甚だ傍立腹在々悪き加藤の仕業かな其儀ならは仕様も有ん先兎も角も彼が屋敷へ知らせ遣はせべしと有ければ即ち飯沼の方へ知らせし處妻の聞て仰天し餘りのとよ能く泣もせず只茫然として在ければ家來谷十次兵衛と云者之と諫め殿の傍事も早やても罷られ無く此上の傍一子初五郎様傍座いなれば拙者傍後見申して復替仕つらん然るに一刻も早く此儀傍

上へ傍願ひ立然るべくいとやと妻も此諫めを聞て少し心を取直しければ其初五郎切て十五六歳もても有ならば然のみ氣遣おも思へねど何と言も年の行ぬお困るなりと打敷き居たる其處へ初五郎直と進み出母様然のみ歎かせ然ふな兒小腕あついと父上の傍加藤幸助何其儘として置べきや恨みの刃思ひ知らして父様の法の手向も爲さんと云は谷十次兵衛大いお悦び流石の飯沼家の令郎柄楨の二葉より芳ばし誠と驚き入てはなり替と復も及や腕の繼之もの只々一心の劔金鐵の如くもてはへば假令敵手鬼神の如しと雖も何難さといへきや母堂様必らず歎かせ給ふべからば某し當年耳順の坂と趣ると雖も其昔し先君も從ひ諸々の軍も大功と顯せし谷十次兵衛もてはへば率是よりお上へ願ひ暫時も替加藤幸助の首提げ來らん初五郎様傍支度有とサモ勇と立て述たりしは天晴忠臣とあそ見ぬおけれ

○秀吉公左文字の一刀と初五郎も下じ賜る事 并 初五郎十次兵衛復替首途の事

然程も初五郎十次兵衛も伴はれ太閤の傍前へ出亡父の仇と報じ度旨願ひし所太閤一々聞し召尤も願ひなるが初五郎當年何歳も成や十次兵衛十三歳も成やは太閤然らば後見の者有

や十次兵衛初五郎未だ幼年より間拙者後見の心得より座は太閤然る上の随分堅固にして首尾能討課とべし勘平の所々の合戦は軍功を顯し通れなる勇士なりしが成らざるとよて命と果せし條残念よて有し早く父の仇を報じ本國へ立歸るべし其時先知の相違なく與行べしと有て涉手づから金子井ふ左文字の一刀と下されしかば初五郎主従有難しと涉禮すて頂戴し頼て涉前を退出して夫より片桐の屋敷へ行き且元を對面して敵討の印書と乞ける處且元頼お肯ひて直様

太閤秀吉公の涉旗本飯沼初五郎元治家士谷十次兵衛と召連れ親の惣加藤幸助と討んと首途及び一條勝負の儀宜敷頼入は警首尾能討以上の早々本國へ送り歸する可きと

天正十二年七月

片桐東市正判

右の通り認め渡ければ兩人受て屋敷へ立歸り斯る上の一日も早く打立べしとて早速用意よ及び頼て吉日と撰び來る廿五日よと宜しからんとて乃ち此日と首途と定め借當日は成けれバ初五郎母と離別の盃盃取替しけるお母の泪お暮乍ら随分無事ふて本望を遂げ目出度歸參

と致さるべし是許りの樂しみぞと暇乞とる言の葉お流石初五郎も堪かねて思ひ涙沈まけれバ十次兵衛之と諫め目出度涉首途よ臨ませ乍ら女々敷涉振舞ふと心得き早疾々と歸めし程ふ初五郎名残の更よ盡ねども勇士の十次兵衛は氣引立られ頼て兩人何國と目途と定め無く旋の空母よ別れて出行ける

母親の歎きも道理なれど十次兵衛の忠義察し遣れて可哀なり未だ年端も行ぬ初五郎と預り氣まそ壯健なれ老の身の行末如何と案じらるゝの口よ言ねど内心よ是を氣遣ひ彼と思ひ二つよの母の歎きと思ひ遣る杯餘所の遣る目も痛のしけれ然バ太閤も深く憐れを垂させ給ひて扶助米等下され悴が歸りと待べしと最と有難き涉意と下され又幸助の母の門前拂ひよ成れしとかや

扱も又加藤幸助の奈良ふ少しの由縁有バ先其處へ便り行暫く此處お身を匿し居んど思ひお勝と肩よ荷さし儘行々松原迄來りし處早夜も白々と明け渡るよと幸助お勝と肩より下し和主の昨日の朝云た通り勘平の我手よ懸て討取たり然る上の最早心お懸ると有と就てハ

我是より奈良よ赴き由縁の者の方へ立越て其上兎も角もせんと思ふなり悦び有やノウお勝  
 といやみお脊と叩きければお勝之を聞て何と返答もなく許り問と伺ひ遊んとそれバ幸助驚  
 き引止め這の开も何と働らさける大反女遊んと爲とも何遊せべき何れへ行とて斯遊出せし  
 ど疾々言ねと迫りしかバお勝無念の齒噛と爲けれ共斯る大悪人と有上からの無益遊らひ事  
 言も甲斐有まヒ夫のみならず殺されんと疑ひなしと思へバ憎き大悪人悪人の恨み一刀なり  
 共報はで暗々討る可と思ふ心と押匿し成程和君の仰の通り今の更々心も懸る雲もいはねバ  
 此上の兎も角も能又討らひ給ひねかしと云ふ幸助怒りと治め然ばと云て二人連立先よ  
 立後よ爲つゝ行道々もお勝幸助と口惜く思ひ且又今宵奈良の宿へ連行かれなば無体な懸慕  
 とモ仕掛られなん然とて何集が爲よ身汚さんやなどと思案と定めながら心とも無く行處  
 お笑の所も開り峠道さへ細き山間お樹木の森々と生茂りて蓋然開き山の名よとひりぬ一  
 方の谷深くして覗くと爲れと勿々も底も見ぬさる此處へ差掛りたる其時しも流石女性の深  
 墓心此處よて本望を達せん者とて後より幸助の足と取と共儘谷へ引落さんと爲けれ共大兵

の幸助争で女の手腕引落さるべき一寸も動かさ何とぞとどと回顧る所とお勝幸助の差違  
 と引抜き眉間を目掛て切付ければ幸助微り傷を負ひ乍らお勝の手腕と確と續へコイヤ汝れ  
 何とぞとる何とぞ爲との大悪人二世と契りし悪人の勘平殿を手も懸たる貴様か憎しと思ふ  
 故今切付し一刀を切て悪人への手向なり最早我命惜のらず勝手よ爲れと云ながら身と聞  
 ぬ齒と噛締無念の眼も血を注ぎ幸助と發打と睥睨しかば幸助是と見て扱ひ汝れ昨日云しと  
 欺りよな斯とい知らず誠と思ひ勘平と殺し我も難儀の身と成しよと残念なれ思へば憎き女  
 めぞ可愛さ餘りて憎さ百倍イヤ殘念目見せて呉んせとて林の中へ引摺り行なふり殺しの慘  
 酷しさお勝の苦しき聲と上げ假令愛めて殺さるゝ共魄の此土よ止まつて和君よ愛目と見せ  
 んぞと云つゝ遂に狂ひ回りに死したりける夫より幸助の血と押拭ひ南都春日の社家へ尋ね  
 行暫時の愛お居たりけれ共永くハ愛も居難くして夫より奥州の兄半太夫が許へ立越んと  
 思ひ頼て奥州路指てぞ急ぎける

多田野の里なる勝女の家あてにお勝の歸り來らざるよ依て所々尋ねれとも知れず然る

翌日聞り咄み女の死骸ある由聞傳へ尋ね行て見し處果してお勝の死骸未も染て有ければ大いお驚き殺せし者誰なるの知れされ共早速其筋へ願ひて死骸と受最厚く用らひを爲けるとなり多田野の里と云い今の大仁村なりしとぞ

○初五郎主從奥州へ行事并十次兵衛川水も瀾る事

然る程初五郎十次兵衛の兩人思ひ運らと船路の勝手宜ければ然の必定中國へ下りつらん先手始其國々々尋ね可しとて乃ち備前岡山へと赴むさ夫より備前備中と様々尋ねければ共手懸りなし兎角その内其年も立又翌年も過去て初五郎既お十五歳と成たりし其早三年も諸々方々を尋ね歩きしお因て太閤より賜りし金子も残り少なぬ費ひ果し其上十次兵衛不圖煩ひ出しければ困難云ん方なく然れども初五郎携みなく看病せしお因り日數六十日程過て漸々十次兵衛の病氣本復も及びける扱十次兵衛中と様幸助の早備前備中も居らざると覺ぬいなり承まはれば彼の兄某しなる者奥州白河の邊も居るとのとお付彼も亦奥州へ参り居らんも知れずさず夫お就ての只今より奥州へ供致さんと存ざるなれ共路用も事欠

き進退谷りてい程も多痛はしくいへ共召る多衣類と只今賣却なし夫と以て彼地へ赴のんと存じし許させ給へ是も亦多父への多奉公某しも亦斯の如くおひなりとて駈て初五郎と自分の衣類と一纏めよし遂お之と賣鬻なして路用と整へ頃の十月の寒空お主從二人肌も薄着れ憂き旅を野も伏し山も寐るのら行々既も奥州へ早二日路と云ふ處まで到りし處其日の夕おた有る川の邊お出しかば主從此處一宿せんと爲たりしお兎まれ向ふの岸へ打越んとて夫より兩人手も手と取て渡りし處思はせ十次兵衛足と踏外し深とへ突と横様お倒れしよぞ初五郎是のと驚き慌てながら抱き上げ辛ふして向ふの岸へと上りたり斯て初五郎十次兵衛と様々介抱けれども息も絶々もて其上着たるものも浸と濡ければ勿々物とも云ず初五郎もほど一當惑なし暫らくの途方お暮て居たりし所其傍邊も荒家一軒有ければ是幸ひと思ひ其處まで十次兵衛と荷た行表より戸と敲きて我々の旅の者なるお老人前なる川へ溺れ既お命も危ふき間何卒内へ入れ火お煖て給ひるべし生々世々の多厚恩なり茲明てたべと云ければ主の老人立出て是のく氣の毒なるとなりお其老人の何方も居給ふ是へ連れて來らる

べしサア〜是へと有ひしかば初五郎やつと生たる心地なし臥たる十次兵衛と抱へ行んと爲しけれ共流石小腕の哀しき勿々揚らば主人の老人と頼みて漸々荒家へと荷ひ入れ夫より老人葉と焚て十次兵衛と暖めしかば是も因て十次兵衛少し正氣づきたり且有て十次兵衛も苦し氣なる顔となし初五郎も熱々見涙と流して中様最惜や若旦那の如く乍ら此十次兵衛を杖とも柱とも思されし何なる武運の盡果しよや十次兵衛早此處まで相果べしれ歎き有んどの察しけれ共是も宿世の縁し有ば何程謂ても甲斐いまだ就て此上淨堅固よて難小題り逢給は首尾能討て亡君の戀憤晴し給ふべし私し此處まで死する共必らせし氣と殺ませ給ふる此儀計りの願ひなりと言聲も早微なるよぞ聞居たる初五郎顔も得上伏居たりし流石未練も泣もやられ老苦しき胸と押鎖め我大坂と出しより今日今迄も頼みとせし内只其方一人なり然るも今其方お別れては何とせん我また斯る年取と云へ禁の行方も知れぬ内別るゝこの哀しけれと言はば十次兵衛押返して遣の言甲斐なきと曰ふ者のな情の此十次兵衛居らざれば難の討ぬと覺しけるのの眞君も飯沼家の若君ならせや武士お似合ぬ其言

斯る卑法の汚量見なら十次兵衛今より主従の汚縁を切らせんと思と暗々やければ初五郎打點頭成程尤もの一言あり假令幸助何國如何ある處も居とも探し出して討負せんと云聲聞て十次兵衛覺ぬす手と上初五郎様夫であと飯沼氏の汚子息なりと云かと思へば心の挽みよ其儘息の絶たりける初五郎の死骸も取付悲歎の泪も暮ければ主の老人之と慰め汚歎き然るとなれ共何日迄云ても歸らぬ事此上の遺骸を少も早く埋め跡念頃お用ふよと宜れとて家の裏の地面へ埋たりしに聞も哀れのと共なり

○老人初五郎へ衣類と恵む事 初五郎九十九新左衛門の家へ奉公よ住込事

斯て老人の十次兵衛の亡骸と取片付夫より初五郎の體たる拾と服せ薪火と焚て之と乾かし又粥を煮進めるとして様々お待過ければ初五郎の限なく悦び汚情何時の世おかり忘れずはん我の先刻より汚聞の通り敵と視ふ者なれば押付け本望達せし上其節汚禮す之返とくも辱けなしと厚く禮とば述了り其夜の經と讀誦して寝も遣きお打過ぬ初翌日と相なり初五郎主よ別と告ければ老人泪と押拭ひ長の汚旅と云ひ行衛も定よ在ねば今日日の汚道留われ

然程急ぎふり及ぶまじ是非よと言ふ初五郎の其芳志の有難けれと一日も早く歸人へ回  
り逢たく存ずれば早歩暇とやべし浮禮の程の勿々も只今爰までい盡し難し然らばと云は老  
人も詮方なく古軍衣と取出し貴殿殊の外は薄着る風引れて成ひまじ眞末乍らも是  
なと饑別よ差上べし首尾よく浮警討の其時までも愚老若世も存在居らば再び目よ掛りや  
さん然ば随分浮壯健ふと思ひ込ぐる挨拶も初五郎も嬉し涙もひせびつゝ勇み立てぞ出行け  
る然るも初五郎十次兵衛は相訣れ心細くも道と迷りて過行共何處か縁家の有ふも非き又懇  
意の者とても有されば如何のせんと思案と回らし乍ら既も奥州路へ入り白河の近邊へ  
到着しければ道端の菓物など商賣してある店へ立寄て私しの稼せんとして尾張國より遙々當  
地へ参りし者なり然る所縁家もなく懇意は者もいねば近頃押付の願ひなれど何卒奉公  
口の浮世話下されたし此事偏ら願ひいと腰と屈めてやければ主聞て扱々此人の仕合者な  
り我等出入の日那なるが兵法の師範と成さる九十九新左衛門謙と云浮方あり恰と此浮家  
て此節草履取と浮尋ねなれば是へ早速目見よ連すさん浮首尾の上の此方まで親判それと

判代少々請たし念の爲なれば始めゆなり浮承知あるやと云ければ初五郎是の浮念入の  
と如何も承知致し何程も苦しからせ兎も角も浮取成願ふなり主人左様ならば一刻  
も早く連すさん然ばと云て夫より髪等結せ願て同道して連行けるも幸ひ新左衛門在宿  
初五郎と見汝の何國の生れよて年何歳なるやと問けるも初五郎私しの尾張國の生れよて  
年の十五歳成すよと答ふ新左衛門能き者あり先々置て見ん随分出精とべしと有ければ初  
五郎有難くいとやて乃ち新左衛門の方よ止りける斯て新左衛門初五郎とば入助と呼せ草履  
取と勤めさせけるが初五郎元來才發の者故主人を始め家内の者までふも氣ふ入れ諸事油断  
なく働き居て師範の家なれば若も幸助の入來るともやと常お心を付て居たれ共似たる者  
へ來らせ然と心の中よ斯く多人數入込なれば其内出會も知るべからせ此家お辛抱して居る  
まそ好らめと思ひしかば彌勤のや觸み夜お及べば我部屋お入て亡父勘平并よ十次兵衛へ  
手向の經など誦し居ける心の内よそ神妙なれ然るも初五郎生れ付ての美男と云殊も年未  
十五歳の若衆作りよて有ければ今年十四歳よなる新左衛門の娘かよと云者不圖初五郎お想



と掛いと淺からぬとよの思ひし流石の年の行ざれば然明白も云出し兼一人胸と焦して居たりし内早其年も暮翌れば天正十五年かゝ當年三五の春を迎へしかば切て思ひの端なり共知らせて欲と思ひ詰め或日何やらと認め人知れず初五郎の部屋へ入置たりしは初五郎の部屋へ立歸り見れば艶書と覺しく上書は八助殿へかよよりと手跡も美事と認め有バコハ如何かと不審ながらも開きて見るよ

君の住邊りの草などしてよ見せばや袖も餘る白露

と有けれ共初五郎心お思ふ仔細も有バ兎角知らぬ顔して捨置ぬ然る處又々一兩日過て思ひの丈と細々と認め送りしは是も亦其儘おして置し處おのゝ斯迄心と示しても返事なまよと口惜けれ此上の押付て行んオ、然と娘め心の只一筋も或夜家内の寐息と規ひ恐び出て初五郎の部屋へと行し心よそ又憎からせ思ひけれ

○九十九の妻娘の様子を立聞とる事并初五郎おかよと賺と事

然程お娘おかよの離と頼むべき者もなく直に口説ん者と夜お紛れて初五郎の部屋へ

ど開け其儘側へ走り寄是八助よと揺り起せば初五郎の起上り是のくは伊願様何故夜中お見苦しき此部屋への出有しを早々帰る遊ばせと云わおの涙ぐみ何の故どの夫りや聞ぬは是迄數多の文送りしは只の一度の返事もなく其上今の其一言情ないぞと恨し女身として耻しくも斯して来たのよ何として此儘直に歸らりよかや八助と云ながら取付纏りて放さねバ初五郎の容と正し見る影もなき下郎め然程と思し召下さると身を取り悉けなくのいへ共然乍ら此身よの些思ふ仔細のひて今心お任せされば何卒深然思ひ切せて給われかし何卒と云ければおかよの猶も指寄て女の口から言ひ出し今更斯と云るよならば所詮我身の是迄なりと泣出しけるよ初五郎も持餘し然程と思召し給らば又何とかの思案も致さん先々今宵の帰るわれと漸々其場と取成て寐所へおの歸しける然るよ其翌晩も來りし處は母の疾くも斯と知り跡より付て部屋の戸口へ耳と寄せ様子如何かと聞居たるお娘の此事夢も知ず初五郎は打向ひ夜前那相立てお口説とも返事のなきよ情なけれ今宵の色よ返事と云ふ初五郎膝立直し斯様のと日那様へ聞ぬなバ吾身計りの伊願様も伊

難儀あらん壁も耳と壁もいへば早々帰るなるべし此儀の逆も叶はず早ふくと急  
 立ければおかの泣々居直りて假令殿父の浮耳も入如何なる要目も逢ふ逆も其方故なら厭  
 ひいせじ吾身と憎しと思われなば筆を手に懸殺して給更々怨みの存せぬなりと云れて初五  
 郎の是の勿体なき事仰せらるゝ者かな浮前様を手に懸殺し夫で此身の何としませよ此儀の  
 浮免下さるべしと云其聲の下よりもおのよの懐剣と取出し然てのお前と頼とのせぬ父様母  
 様許して給南無阿彌陀佛と稱へつゝ既よ斯よと見ゆるよぞ初五郎慌て押止め然程も迄も  
 思し召浮事なら今宵の夜も早更の程よ明晩浮出なさるべし必ら相違の致そまじと聞てれ  
 かよの欺るゝとの心付かお然に明晩是非と約束堅めて歸りける母の始終と聞終り見  
 付られての悪のりなんとて恐びくゝお寐所へとまその入よけれ

○おかよ思ひ煩ひの事并おかよの母八助を御養子よ望む事

然る程お初五郎思ふ様合娘の志ざしの嬉しけれと誓と現ふ此身として頼りけとの最初より  
 せまじと心願立し程なれば夜前の漸と驟して歸したれと今宵の何と言ひ紛らさん鬼やせん

角やと思案と爲して居たりしが宜しく今宵の部屋の前と堅く鎖し出會さる様なとべしと  
 心強くも其夜の堅く戸と鎖して居たる所娘の斯とも知らずして日暮と待のねて既よ部屋へ  
 と行見ればコハ如何と押と敲けと明に社内と覗きければ燈も消て闇かりし程よ餘方なくも  
 其夜の寝所へ立歸りける借壁晩よあり又々到る見る處今宵も夜前の通り殿しく閉て在し  
 がおのよの借の八助も欺されしかと悲歎の泪も心も乱れ其夜も借平我寐所へとみと歸りし  
 ぶ是よりしての唯鬱々として煩らひつゝ食物さへも食べざるよと双親の大いよ驚き早速醫  
 師と頼と種々療治とさせけれども療治の効の少しも見ぬお猶も次第くゝよ衰へて今の醫師  
 の手術も盡しよ因り母親の歎き一方あらむ種々思案を運らし或日夫新左衛門よ打對ひ妾  
 少々浮願ひ有り浮聞届け下さるやと問れて新左衛門是のまた改まりたるやとかかなシテ其願  
 ひとの何事なるや疾言ふべしと有ければ妻の別の事よもいはお實の娘かよのとよては病氣  
 の横と熱々見やそよ勿々常体の病との得よと思はれやさき妾先つ頃より心と付て居りし處  
 娘の病氣全くの八助も懸想なし言寄ると雖とも八助之と聞入やさず夫故想ひ焦れて出し病

と存じし就ての賤しき者との汚蔑視も有可れど何卒渠と娘の養子とせられ此九十九家と染  
 ん汚繼せ下さる様此儀吳々の汚願ひひて自然し時の娘の病氣早速平癒なと耳ならず妾存じ  
 ひふ八助とて木石よもいひを然るよ身と誑み斯も心と固く用ひ居ると是見所める者と覺  
 ひ又親の慾目かひ存せぬと此近邊は娘數多ある其中よもつよは勝れし者有とも覺ゆさず  
 殊一人娘のとふもいへば迎ものと渠が氣入し者と録取せ度存じいへば此儀汚承知た  
 まいれかしと娘と思ひ家名と思ひてやければ新左衛門之と聞何様娘の八助を慕ひ居るとい  
 との我も疾知れり又八助の人品を見るふ賤しき者ふ非ず其上弟子どもの對手と爲しては  
 お適れなる手の内渠自身尾州の百姓といへ共決して然るの非ざるべし此家の録取て不足  
 なき者なり幸ひ明後日の松前氏の試合お付門弟と残らず遣ひし我も亦夫へ參る間其後ひて  
 八助へ右の由と申せ先内祝言と取結ぶべし夫々への披露の追て吉日を撰み沙汰なさん鬼  
 も角も内祝言然るべし道理なりと承知しければ母の大きい悦び早速の汚得心有がたく存じ  
 い然様ならば娘へ先早く申せんとて夫より娘のもとへ行斯様一なりとやければおかよ

此一言と聞より顔色頓直り霜の朝日は解るが如く瞬く間お氣分豁然と開けしかば早速よ  
 病床と立出其日遅しと待居たるお程なく當日お成ける故母も娘も勇み立髪と結び浴となし  
 其内お早日も暮て新左衛門松前氏へ行しかば母の下婢へや付諸事萬端の用意と聞へさせ夫  
 より娘へも白小袖と着せ母も衣服と相更め最美しく出立たるよぞ初五郎此体と見て何とも  
 合點行す居たりし處奥より八助殿汚召なりと聲掛られ何事あらんと出行しお娘の白小袖よ  
 て綿帽子を戴き上座は直り母も衣服を改め真中お坐り其外島臺躰子など飾り有ければ初五  
 郎不審更お晴を末座は躰まりて汚用の儀いと聞ければ母言辭と正し八助殿近よ寄へし苦し  
 からず倍斯様の形容無不思議も思ふらんの日那様其方お心を汚見振有て其方と今宵娘か  
 よの養子と爲らるよ由汚申付故今晚其方と内祝言と致さるなり夫々への披露の追て吉日  
 と撰み取行ふなれば近よつて娘と祝言の至盡致さるべし斯やそも其方の誑み深く娘の心  
 の切なるよも避て猥りのともおらざる其上武衛の手續と云ひ天晴あるとの汚事お幸ひよの  
 家お男子なれば之よ因ての汚考へなり此上の娘と中睦しく九十九の家と相續し給へるべ

しいぎ近くへと有ければ八助發と両手と付是の有難き仰なれ共由縁も未だ詳らかも上  
 ぬ僕れと斯程も迄も汚最負下され九十九新左衛門様とすての人も知つたる伊藤範の貴き伊  
 家と何として我々如き下郎匹夫お繼せられんとの仰らるゝぞ憚り多し此義の汚免下さるべ  
 しとす母の打消して然ほど遠慮及ぶ可らず此方より許して祝言致さるゝ違背の却て  
 不禮成べし早々祝言致さるべしと言聞されて初五郎思はず發と差俯ら思案の体めて有しか  
 母の氣と急是八助疾々返事して給と迫詰られ詮方なくも初五郎頭へ擡げ御意も背くおの  
 いはねと此身よの些思ふ仔細もい程は此事はかりの汚免とぞや出せば母は訝りや其仔細  
 と何事を國元よ言號めても有のかと云は初五郎はコリヤ汚無恥なる汚尋のな思ひも寄ぬ  
 其仰せと膝組直と母は見遣り然らば此家と不足と思やるかと言顔を見て初五郎又しても  
 勿体なき仰かな不足等とは何として然らば何故や、夫は夫とも何を其身よの此母娘のす  
 と女と侮どり云ぬと見ゆれと言ねば其方の爲悪し疾々言ねと急立ける

○新左衛門家へ傳はる一刀を八助は渡す事 并 初五郎本心へ願ひ奥州出立の事

此時初五郎少しも疑せを仔細如何ふと仰有れども此儀はのりの假令一命を召るゝ共又何様  
 の汚責あるとも打明し難くは問何卒汚用捨下さるべしと何度問ども同じと探返し一すよ  
 を母も今さら詮方盡き思案も暮て居たる折しも娘の手早く懐胎取出し既よ自害と見けれ  
 母の達てし押止め短刀拾取膝立直娘出のした然ながら未だ仔細も聞きて死せるの犬死  
 同様なり八助の心底へ聞し上死を共運さるとよの有まじ暫時の待てや娘よと言つゝ八助お  
 打向ひ今見る如く娘よの其方の心次第めて死せる覺悟とせしと見ゆたり仔細も依ての娘と  
 ば殺す共又生を共開の何れ共其方の隨意を根を居あていざ返答をと言葉忙しく問ける處へ  
 願て門の扉と押戻り主人新左衛門と内入り奥の座敷へ通つて見れば娘の俯伏 歎く体  
 母の短刀と片手お持又八助の両手と組むやら考へ居たりし有様合點行せと不審のなせども  
 流石の物よなれたる新左衛門笑み含みては様我今宵早くも歸るべのりし處善舞の宴も時刻  
 を移し今のしも歸りて見るふ此体なりしは未だ後片附の出来ぬと見ゆたり勝手の事も麻勞  
 れんを行て見んナウ妻と云つゝ立し妻の押止め暫し待下さるべし良人ふも疾は承知の通

り今宵娘と入助の内祝言を結ばん爲高端の手筈調ひ一處入助一圓合點致さす新様く惣々  
 と有し仔細を物語れば新左衛門残りま置て打案し入助一命も替ても語らぬと有上からの尋  
 常のとめての語るまじし然バ我も一ツの考へ有と云りし一圓へ入たりし金作りの刀  
 を持いだし初五郎の前も置て倍々様此 刀の掛置し傳へる九十の長 自ら系圖し我の  
 魂ひども云物あり是と汝も與ふ  
 る間必ら老翁忽と思ふ可らま疾  
 受取れと有ければ入助不審な  
 らも忝けるしと押頂けバ新左  
 衛門重ねて云様我今此刀の汝  
 りたれば我魂ひの即ち其方  
 ひなり然れば其方何様や難  
 細わり共包まを語るべし必



言の致とまじ申承まのらんと有  
 ければ初五郎も其理を責られ成  
 程汚心を込られし汚一言身染  
 る渡りて覺ぬひ一命も拘る義  
 なれ共今の何とか包みやさん然  
 バ委細とや上んと容更の實の  
 私しと親の報誓と思ひ立十三歳  
 の時本國と出身と誰と不浄と受  
 せ魚肉も食せせ只一心も本望達せん念願よて此段推察下はるべしと思ひ入て言けれ  
 バ新左衛門の又問やう然バ其方の何國の生れぬて如何なる人の家來もや實の姓名の何とか  
 やといへバ初五郎の首く下父の秀吉公の侍本飯沼翁平元勝とや一子同苗初五郎元治と  
 やハ某しなり以來然様も承知と云バ新左衛門の扱ふとと打驚忽ち顔厚くして



初より様子有げどの思ひ居れ共斯様の譯との言知らせ是迄盡せし不禮の段平も免て給ひるべし然るも其初五郎殿何故我方への奉公なせしぞ仔細に疾々語り給へと問れて初五郎の然らばあては替ひ同じ殿下の御旗本なる加藤幸助と申者にて是より尋ん其爲ふ頃の去ぬる十二年の七月家來十次兵衛と申し召具し國許へ出夫より先備前岡山へ居たりし處幸助の兄某しなる者遂此邊近所へ居ると云ふと知しるは去年十月岡山へ出立なし既小奥州へ二日路と云時或山川を渡りし處十次兵衛遇りて水も瀬も相果しかば是非なく所の腰が家へ立寄其家の老人の情みて精骸の其處へ葬りけれ共後の某し只一人何處へ便らん當もなく只幸助が奥州へ由縁有どのと云ふ因夫を目當ふ此館への奉公致せし其始終の難難の言語ふかしくしと悉細く語れば新左衛門如何なる其方の推了通り其幸助と云ふの我門弟加藤半太夫と云ふ者の實の弟の由もて先年此地へ來りけれども此幸助と云者生れ付ての人非人よて兄半太夫の妻も怒慕と仕掛事願れて人へ評判と立られ是が爲當國と逐電せしかば早東國へ足と向ふ事有べからき今其方在甚此處へ居給ふ共本望違とて叶ふまじ今暫くの留めずさん心なれ共

其方の大事と聞上の留めずも如何なり疾愛と打立て目出度難と討給ひ其時娘が望みても叶へて下され此事頼みなりと云は初五郎の打點頭斯て日數を送り居ると亡父への不孝此上なし然らば仰も隨ひて直様出立さんと頼て支度と調へしかば新左衛門夫婦娘まで名残の盡ねと言葉を揃へ然らば随分首尾よくと言し中も新左衛門の金子五兩と刀一振取出し是は寸志の贈けなりと渡せば初五郎押戴さ成程本望違とる上は消息女れらよとのと妻も受ん必らき吉左右待われ武士の一言違ひはせじと云ふ聲も亦勇ましけれは娘の悦び大方ならを暑さも増る夏の旅随分心付らるべしと云ひし所持の藥入と取出し裏手早く一首の歌を書添ける

別れても心ひとつの旅衣幾重かさねて山路行けん

初五郎是と請取悦び勇んで出行ける

○初五郎白坂の宿めて熱病と煩ふ事并初五郎善への路用と藥價お遺果と事

既も飯沼初五郎の九十九の館と首途なし夫より相州小田原ふ少しの知音あると便りお先小

田原へ赴かんと思ひけるが道よて人目も懸らんと恐れ太閤より拜領の刀と九十九貫ひし刀とを澁紙包ふして脊負腰よの只自分の一刀を横たへ陸奥の山又山と打越て早下野の境なる白坂宿と云ふよ着ければ初五郎の此宿泊りしが如何爲しけん其夜俄か大熱と發し苦しき悶へ家内と狂ひ回りしかば亭主驚き一人旅の者死なれての難儀なりとて早速醫師と呼び見せし處醫師の診ては大傷寒なり先々藥と與へんと夫より百般よ手當と盡しけれども效なく翌日よなり翌々日よ成ても飲食さへ咽へ通らず其内段々日數と経るの少し覺れれ共肉落て骨と皮計り成しかば今兩便とも自身よて行くと叶ねば醫師の此上の人參と用ひせば命も危ふかるべしと云ふ亭主は命さへ助る儀ならば人參なりとも苦しからせ見れば此人の由緒も有様なり人參の二兩や三兩費を共不都合の儀の無るべし然ば其如くせんとして夫より人參を取寄飲せけるよ流石年若の者人參の效よ因て日よ増し快氣しけれども何分大病よて有し故未だ飲食充分ならず漸々日數六十日程過て稍快氣よ趣きしかば亭主の初五郎の臥褥よ來り借此度の手強き傷寒を煩らひれ難難儀成れしならん借病氣よ付ての藥も多

分お用ひ又人參とも進らせしが貴殿旗よ掛てのとなれば餘金の持合せもあつたしけれと一應の事聞くなりと云れて初五郎の面目なげよ何様推察の如く大金の所持致さる然り乍ら今爰よ少しの持合せ有ば不足ならは是よて宜しく取計らひ給ひるべしと云て新左衛門より賞ひし五兩の金子よ出しければ亭主のさらば先是丈持貨は不足の處の何どか致さん何れ又後程と云捨て其場よ立去り頼て醫師其外藥種屋等よ呼び集り病人と斯様くの次第なりと段々のとよ言て扱ひし處元來此亭上慈悲深くして平生人よも能く思ひ居ければ皆々も心能承知し一言の異議言ふ者も有ざりしよより亭主の乃ち初五郎よ斯と告しかば初五郎の亭主厚く禮を述べ頼て其家を立出ける

○初五郎下野路よて覺へどなる事 并百姓喜助親切の事

然るよ初五郎六十日餘りの煩ひなれば歩行も心よ任せず三町行ては休み二町行ては休み其上病氣よ因て路用も皆遣ひ果しければ道々も人の門よ立て食を乞などし漸々一日よ二里か三里つよと歩みて幸くも三日路程來りし處俄のよ腰痛みて難儀しければ道端の大木よ腰よ

ち掛て稍一時計りも休み夫より杖を廻りて立んと爲よハ何とかがけん腰より下一向は冷て立事叶はず因て又暫く休み又立んとそれと足も覺は有ざるも更も動くとも相成ねハ初五郎是は哀しき哉何とて斯様な難儀をるかと身と揉頼り急りけれ共足は益々冷痺れ遂は黄昏迄も癒ざりしよぞ餘儀なく此處ハ一夜を明しける打翌朝ハなり村の百姓通り掛りよ是を見て不思議と思ひ側へ寄り如何せしぞと尋ねれば初五郎私しといハ奥州より相模の小田原へ行者おていハ堺の明神(白坂宿と云)にて傷寒と煩ハ六十日計り絶食なし漸々此間肥立是まで参りしかとも病後の故ハ一向足冷て起と能は是よ因て一夜と此處おて明しいと涙ながらおやければ百姓之と聞き見ハまだ年若の身と以て夫ハ誠ハ不便のとなり惘然の体よて有し杯と云ける其中よも喜助と云ふ者ハ様夫ハ病後ハ野宿と爲し故ならん然ハ先此處おて養生致し本復の上打立べし小屋よても作り興へんとて夫より喜助ハ諸人ハ勤め竹越杯近所より取寄せ自身先立ちて假舎と結ハ先初五郎とハ爰へ止置夫より喜助ハ村中へ相談なし三度の食とも絶す運ハ萬事ハ心と付親切ハ世話をなしけれども此處ハ米不自由よて餘儀なく

常も釋計り宛行れしかハ初五郎之と難儀と思ひ往來の旅人より一錢二錢の合力を貰ひ之よて子供等と頼み餅など買て食し居たりしハ初五郎爰も居るとも既ハ二年と越ハ當年天正十七年よして齡も早十八歳と成けれ共腰は未だ勿々よ起せ因て初五郎熱々思案をるよ然と尋ねるとも當年よて早既ハ六年なり無事の身と以て諸國と經回りてさハ勿々よ知れぬ者よ斯く瘡へと成てハ何時警も回り逢ふとの有べき能ハ武運の盡たる我身ハ親の替とも耐得せして徒爾ハ烏兎と送らんと不孝是より大いなるハなし所詮存命て甲斐なき身なれば腹切て死んか然よても大坂お居給ふ母人ハ今日ハ首尾よく戻るか翌日ハ難耐て歸るかと待院居させ給ふも歎かハし又二ツハおハかハ殿が斯と聞たらハ嘸や本意なく覺せらん嗟呼我ながら思案よ盡たり如何ハせんと暫時ハ涙よかき暮しハ又無常心の運り來て母様おハ殿の歎きも然るとなるハ事此世を早ふなし冥土よ赴き亡父へ沙院なさんお増ならんと思ひ出てハ勿々よ心もそハる早其日より村人の運びて呉る食物とさハ弗り斷て喰せざるよぞ村童等ハ此体よ見て何心なく喜助の許へ告報せしかハ喜助聞て不審よ思ハ早速ハ初五郎の許



へ相越し汝何かなれば食物と断しやと問れて初五郎消然として其汚毒ねり然るとなれば僕  
 れ汚當所へ立越てより斯皆様方の厚き汚悪みと蒙ふれども然と此病氣何時全快爲とも覺へ  
 ずさき一生斯の如くよての望みと達するとも叶ふまじ然る時の皆様方への汚返禮も成難く  
 生て甲斐なき身なりせば所詮一刻も早く餓死せんと夫と存じて斯の食を断しとなれば切て  
 死後の一遍の念佛稱へて下されたし假令此身の土成とも汚恩の程の忘れずさき願ふの此  
 事の外のねば只幾重も汚許し下されと云ながら跡の涙ふ沈みけり喜助之と聞終りて成  
 程夫も道理なれと一度死しての還らぬ者よ汝も未だ年若成れば癒らぬと云ふとも有まじ然  
 る氣弱のとやさんより先々暫くの辛抱して其内少しよても癒りたら其時汝の言ふ小田原と  
 やらへ赴くべし死ぬなどと言ふとの呉々思ひ止まれかしと最親切に慰めて喜助の我家へ歸  
 りける

○初五郎車と惠まるゝ事 并加藤幸助伊勢參宮の事

斯て喜助村人と呼集めて相談なしけるの此頃聞は彼の覽への非人と承らく村人の世話も成  
 と氣の毒と思ひ絶食して死んと思ひ定めし由なるが彼若も果なば代官所へも届け其外理じ  
 るとなど物入も掛るべき因ての事そ彼が無事なる中も幾許かの錢と持せ此村と拂ふこと宜  
 からんと思ふあり此儀如何やと問ければ一同の者も成程夫が宜からん然ながら錢と持せ遣  
 るとの易けれと那の容よての追拂ふ手段有まじ如何して追拂ふやと云ふ喜助夫の渠小田原  
 へ行たき望みの由なれの駕籠よての人も入ふ付乗の乗べき程の車と拵へ遣とべし足の利ね  
 と腕の達者なる故棒よて押行くと自由なり世の譬も佛千體作るより人の命を救へと云然  
 パ斯様よして遣さば第一功德も成銘々の爲も宜るべしと理を説て聞せば一同も然りと  
 云て承知せしむぞ喜助の早速車と拵へ頼て初五郎の前へ曳行さすと見られよ上りの雨露  
 と防ぐ屋根もあり又押行棒も二本迄添て有は汝が望む小田原の勿論京大坂長崎迄も此車よ  
 て押行時の自在なり是と今汝も遣はせ問是ふ打乗り志ざと小田原へ赴くべし何時まで斯し  
 て在も無憂事ならんと思ひ斯の計らひたり早々用意有べしと云れて初五郎の有がた涙も咽  
 び入り汚禮の言葉も勿々盡されずさき然らば仰み隨ひて汚心入の車殿のんと厚く禮と述べ頼

て其車ふ打乗り此村とまとの出行けれ斯て初五郎の道とぐら食を乞ひ又り里の幼童杯も頼みて車と曳せ万苦と積で漸々小田原へ來り近邊と此處彼處尋ねけれ共更も替の手掛りも無其内天正も早十九年となり文録と改元して初五郎今年廿歳と成けれ共未だ替の行術少しも知れ此節初五郎思ふ様我家と出既ふ八年及べ共未だ替の手懸りなし替と現ふ者曾我兄弟の宮へ詣ずれば何時かの替も廻り遭ふと聞及べり爰の幸ひ處も近し然るに富士の裾野へ立越て兄弟の宮へ詣でなば神の引合せなどか無らんやと思ひ立し吉日も翌日とも云せ其儘直も出行ける爰又加藤幸助の過し天正十二年飯沼助平と殺し又聞り時よてお勝を殺し夫より南都へ行し爰も永く居兼轉じて奥州へ立越兄の許も居たりし處兄の妻も不義と仕掛け忽ちと露れしかば是も因て又此處とも逐電し遂も下野宇都宮へ行き從弟某しと頼みて先爰も七ヶ年の間爲とともあく居たりける然るに此土地の人々先年より伊勢參宮の講中と結び月毎も掛錢となして毎年春の圖と引き當りし者參宮とるとの定めよて幸助も此講も加入のたとゝ勤められしに圖も當らば參詣せでの相成ず敢持身の由なきととて始めの程の掛錢

も出さる居たりし處此節も相なり熟々思ふ様我大坂と立退しより早八年も及びたれば今我と付現ふ者も最早念を絶て尋ねまじ然るに今年も伊勢講も加のり圖と引て當りなば參宮とべしと思ひ立しは是幸助の運の盡とぞ思ひけれける因て幸助の世話人の許へ行き以來掛錢と出と間圖と引せよと頼みしは皆々承知し圖と引せたる處幸助の圖も當りしかば人を幸助の仕合者あり今年迄掛錢も致さるるのみ只一度圖と引て當りしは是太神宮の伊加護成ん然るに打立給ふ可とて夫も餞別など致しければ幸助の大い悦び夫より心静か又支度となし頼て伊勢路と指し打立し處日を経て小田原の宿へ着しけるは時しも黄昏のと成しは此日初五郎の曾我の社へ參詣なし小田原の宿外れまで戻りて車の中より行逢ふ人は一錢二錢の合カと乞居たる處幸助行懸りて常の非人と思ひ汝の壁への非人とな不便の者なり我今伊勢へ參詣とるなれば功德の爲合力致し取せるなりと首も懸たる錢四五十文と取出し夫請取れど投げ與へけるは初五郎有難ふと云ながら見れば錢の多きと不審して思はず頼と打見やるは是年來尋ねし警幸助なれば發と驚き俯伏ひきたり然るは幸助の初五郎と幼年の時見し儘も

て其上此節の体なれば見紛ふと云ふも道理なり實は初五郎曾我の宮詣でと志ざしたると神明の引合せを思ひければ

○初五郎箱根へ車と押上る事 并松並主計初五郎を見て不審する事

扱も飯沼初五郎の警幸助も出逢發と思ひければ共曉られての一大事と素知らぬ顔して行過しが彼何れの旅店へ泊るかどて遠くより跡と付く行けるは旅店の女共東西より出来り頼りふ幸助と引止ける其内一人の女幸助と只ある旅店へと引入しかば初五郎直此旅籠屋の門先へ車と付ての見たれど差當り何と爲べき様もなく氣ばかり焦ちて内の様子など窺ふ處旅籠屋よての忽ち店の戸口を鎖しければ彌々討べき手便無因て思案と通らば斯ての容易のよての討難し難い手足も達者なるは我の斯の如くの不具なれば所詮警難所は差掛りし時足の惱まど付込で不意と討より外の有まじ夫の幸ひ彼箱根へ掛ると必定なれば我の是より早く車を押上げ難所めて待受を難所めて戦ひ我の百倍の利あるべし是屈竟の謀計ありと思ひ付夫より箱根へ車と押上げ此方彼處と難所と尋ね廻りし内一方の深谷一方の敷竹生真

り其上足場の岩角よて甚だ險しき所有しかば技よそ屈竟の場所と思ひ即ち此所へ車と停りけるは又熟々と思ひ出ると斯まで辛苦の盡せども覺への身なれば反り討み逢ふとも圖り難し年來の警は逢ひ乍ら晴ての勝負も出来ざることの陸我身程武運お拙き者の有は然りながら切ての名乗達し上輕傷なり共一太刀試み夫と冥途への土産として亡父様や此世お在る母人様へのや譯せん斯る不具の身の是非も無敵して給や亡父様や母様よと舊時の泪も暮たりし其内よ夜も早更て丑の半刻とも覺しき頃は一一人の旅人大小腰箱合羽と若し火繩と振つゝ來りしが初五郎が泣居たる側へ直と寄て汝何者なれば夜更に斯る處をば妨げを疾名乗れ盜賊の類よても有けるかと問れて初五郎私しの聲の非人よて勿々盜賊などよていひのせと云ふは彼の旅人火繩を振りく光りよ透して能く見れば言ふは遠の如向も覺への非人よて有ければ然らば吾少し休息するなれば車と脇へ寄せ可どて夫より旅人の愛も暫く休み居ける

○初五郎旅人よ助太刀と頼む事 并旅人姓名と明し助太刀と討合事

斯て初五郎の彼の旅人と熟々と見るよ小兵なれ共顔色過ましく何様一器置有べき様も見  
 ければ我も斯く有たらんか、と勝負せんといと易けれと足腰の利ぬよと残念なれ今  
 とて此人と見る浦山しよと思ひの餘り貴所様より夜更て此山中と通るなると何  
 用有ての儀みゆと問けるみ彼武士様我の西國の者めて朋輩の者と議論と致し聞らず  
 人と成夫より諸國を廻り歩行なり聞バ道箱根の山中夜更も通れバ妖怪の者出るとの  
 道土地へ來掛りしと幸ひ修行の爲斯様も夜更て通るなり然るよ人のすの偽り妖怪らし  
 者更も見當らずと聞より初五郎夫の近頃浦山しよとなり道初五郎とても無事の體よ  
 ならばと思ひせ云けると旅人訝り問答め羨ましの汝が足の不自由なる故我々の如く速者  
 成度思ひてなりやと云バ初五郎仰の通り其速者なるが浦山しく借夫お就き些許  
 度とのいづ憚り乍ら浮聞屈下さるゝやと聞れて旅人の其顔と度どの何事と合力よ  
 し呉よとすのか非人と有バ合力せぬと言ふも非を然バと懐中へ手と入るゝ初五郎否々然  
 様の義よての浮座なくいと云ハ旅人の然らバ車を曳下吳よとすのかと聞れて初五郎の然

よても無と云ふ旅人の借の何を頼むぞ何事なるか言て見よと云れて初五郎の然らバ某し  
 出さん然ながら必き浮連背の下さるまじきやと云ふ旅人の暫時考へ仔細寄ての假令火  
 水の中たり共引の氣象の某しなれバ随分願ひと叶へて取せんイヤ語るべしと肯ひしかバ初  
 五郎先の早速の浮承引千万以て有難くは然ての包まきや上ん私し儀の親の誓と討者めて其  
 離今夜明よハ此山中を越ゆる筈も夜前より爰來り待受ると雖も何とすも此形状めてハ  
 返り討も逢ふも圖られ難し然とて止るも止られせ夫が爲爰の扣へひあり斯る次第めてハ  
 程も浮出合すたるよ此身の幸ひ何卒助太刀して給へらば是と生々世々の浮情けと眞實と  
 打明け頼みけれバ旅人の一々聞下りシテ此方何れの者よて又姓名とバ何とすさると聞れ  
 て初五郎の然らバ某しの太閤殿下浮直參の浮旅本飯沼勘平とす者の一子同苗初五郎元治  
 とす者なり誓討の証據のまれ爰ふと首お懸たる片桐の添状の一札を取出し旅人の前も差出  
 せバ旅人の一札と讀終り然バ其幸助と云者全く此處へ參るべきやと云ふ初五郎の如何も  
 小田原よて正しく見届けし間此處へ參ると相違なくいと云ければ旅人の義と見て爲さるハ

勇無きなり必き氣遣ひ爲給ふな急度助太刀致とべし斯様なとの武者修行の身の望となり我  
 ちその薩摩浪人松並主計とす者武士の相互に頼て幸助爰へ來らば美事討せて盡らとべしと  
 流石丈夫の一言は今まで打惹れ居し初五郎も忽ち心勇み立夫より兩人夜明遅しと待掛たり  
 斯て早東雲も近づき人馬追々通行するも主計初五郎も打向ひ往來の旅人も斯多ければ隨  
 分見外し給ふなど云ふ内暫らく人絶て折々只一二人づゝ通るのとなれば主計の兎角氣と様  
 み出し若も今の内見外しし給ひぬやと氣づ付ると雖も初五郎何ぞ見外とこのあるべきや  
 只一心は向ふの方のを見て居たりし早日も三竿の高さより上りたれ共未だ來らざるも主  
 計の不審し何なれば斯延引などを身幸助の泊りし處覺ぬありやと云ふ初五郎の如何も  
 覺ぬ居りし西側みて出外れより二軒目まで有と云ふ主計の然らば某し行て見來らん程も  
 暫時待居給へと云つゝ麓へと走り行二軒目の宿屋へ行て窺ふも道方の幸助急がぬ旅の習と  
 して夜と俱も酒宴し殊の外難過したる体にて今漸くと草鞋を穿立出る有様なれば主計此体  
 と見より急ぎ立降り初五郎も只今二軒目の宿より六尺餘りの大男出掛たり察する處是幸助

て相違なしと思ふなれば最早間もなく來るべし用心せられ飯沼氏見外と有可らせと云  
 て主計も手早く身支度となし幸助の來ると今や遅しと待掛たり

○加藤幸助箱根山へ掛る事并初五郎主計の助太刀にて首尾能警を復と事

扱も加藤幸助の夜前の酒氣未だ醒切ぬ共旅中の故遅々なら紺の合羽と着用なし願ふの  
 長さ大小と帶し笠を冠り草鞋と穿き緩々宿屋を立出掛けて箱根山へと差掛り杖もたれ山路  
 と辿る足遅も休みての立ち立ての休を東西と見廻しつゝ來ると初五郎の早くも見付け主  
 計は向ひ彼奴こそ當の警加藤幸助ありと聞より主計心得たりと一刀提へ幸助の歩行來る向  
 ふへ立塞り大音も加藤幸助待と云ふ聲も驚き幸助の「ハ心得難き姓名呼ひり我名と知て止  
 る汝の開も何者もて又我は何用有てのとなると云ふ主計の「呵々と打笑ひ我の松並主計と  
 云ふ者なり此車の中は居る飯沼初五郎元治とて汝の討し勘平殿の嫡男父の隣と報せん爲  
 め永年汝と尋ねし處今日今汝も出逢と雖も不具なる身故汝との勝負相叶はず依て我も其助  
 太刀と頼とたれば我今汝も立向ふなり率尋常の勝負せよ仔細の其身も覺ぬ有んと聞て幸助

い如何にも正は覺ゆ有なり然乍ら見れば腰も立ざる不具者として我とハ警と現ふと片腹痛  
 き次第なり又其腰抜の助太刀する已れ等如きの影胸者此幸助は二人三人掛りしとて何と爲  
 べととも成まじよし〜汝諸共路果、後害の根をハ斷可と云ハ主計ハ火と急立其大言ハ死  
 でから言へ何程汝威かしを言ども最早遁れぬ籠り無覺悟ひるげと言けれハ幸助も心得たり  
 と笠と脱合羽と取除け三尺二寸  
 の大薬物と扱放とよぞ主計も直  
 ちみ立向ふ此隙は初五郎ハ隙て  
 自身拵へ置し竹片の弓と取出し  
 早くも矢と番ひ年來の恨み一矢  
 あり共受取れと切て放てハ過ま  
 たず其矢幸助ハ胸板ハ確と立け  
 れハ主計得たりと付入て矢庭よ



幸助ハ右の腕と切落せしとぞ幸  
 助手早く左の手よて脇差と抜殘  
 念なりと切て懸るハ主計飄然と  
 身と變し又付入て左りの腕をも  
 打落と打落されて流石の幸助早  
 叶ハじとや思ひけん宛然夜叉の  
 荒たる如く血眼も成て主計ハ腕  
 も喰付けれハ主計直ちハ襟と帯  
 をハ確と掴と力ハ任せて直と初五郎ハ車の前ハ曳摺り來り助太刀なれば腕腕をよく打落し  
 たれ絶息の一刀早々其方刺れよと聞と齊しく初五郎ハ思ハる腰の立しかハ是ハ不思議と自  
 分ながら呆れ果暫時ハ物をも得言ざりしハ本望遂し嬉しきまゝハ吾身のとハ差置て直ち  
 ハ絶息とぞ刺たりける主計ハ悦ハ車限りなく出來されたり初五郎殿扱今迄も起ざる且の急



又起しの不思議なり、邊今までの偽りしかと云れて初五郎の否々決して偽りやを某しも  
誠不審せしなり是とすも其方の厚恩と受し、因年來の本望を達したる故、始の餘り難  
病の足も起しと覺ぬ、邊の程言語も争か盡し、此上共宜しくと云ふ主計の然り、  
刻も早く所の奉行お訴へんとて夫より兩人打連立籠へ下り奉行所へとまゝの急ぎけれ

○初五郎主計の兩人秀吉公の邊前へ出る事、并主計邊直參なる事

斯て兩人の代官所へと出事の由、訴へければ早速役人の者、兩人と引連れ檢使として立越委  
細と取調べて立戻り而して兩人とバ代官所へ留置さ頼て大坂へ使者と立て此由言上致しけ  
るよ折から秀吉公よ、朝鮮邊征伐として肥州名護屋より邊出陣在しければ早速貝塚權太夫吉  
岡十兵衛と云る兩人先小田原へ下り二人と連て直ち名護屋へと赴ふきける時、又文徳元年  
九月廿七日なり、斯て貝塚吉岡の兩人の急ぎ太閤の邊前へ出右の趣より委細上し、處飯沼松  
並の兩人と邊前へ召出されとの由言上致さば、初五郎乃ち段々の次第と言上  
なしけるよ秀吉公甚だ感と給ひ約束なればとて、先知三千石の其儘外ふ二千石の邊加増まで

有て都合五千石下され名とも勘平と改むべき様仰せ付られしかば、初五郎の有難しとやて、  
請と次は松並主計と武士の節義と守り只一言の頼みよ、助太刀致したる段奇特なりとて、新  
千石賜り以來邊直參と仰付らる然る程、兩人の天へも昇りし如く、大いお悦び貝塚吉岡へも  
厚く一禮と述べ夫より邊暇と願ひて大坂へ立歸り母は對面して、借諸事万端の物結りしけれ  
ば母の悦び譬へ方あく死したる者よ、逢たる如く餘りの嬉しさよ、亡父勘平并びよ家臣十次兵  
衛の在ぬと打敷き急お佛壇に向ひ香華を手向暫くの稱名あしてぞ居たりける、借又松並も義  
心お因て思ひ寄す邊直參となり高も千石頂戴しければ、是より彌よ飯沼と因と深く、師家追々  
繁昌して美名と四方よ、輝かせし、目出度かりける事共なり

○初五郎昔日の禮として所々へ立越る事、并九十九家の娘おかよと妻と定る事

斯て初五郎の辛苦中所々よ、憐情を懸くれし者の方へ立越其恩と報ひんとて、翌文徳二年の  
春よ及び百日の邊暇と賜り供人も數多召連れ五千石の格式よ、大坂と打立ち先、番よ谷十  
次兵衛の死せし奥州路なる川端の家へ赴き老人未だ達者なるやと尋ぬるよ、老人堅固めて有

ければ大に悦び早速對面して段々の禮と述べる處老人の宛然我子の出世したる如くと思ひ  
 暫時嬉し涙を咽び物とも得言を在し初五郎乃ち白銀五十枚遣し暇乞して別れける夫  
 より奥州九十九新左衛門の方へ行飯沼初五郎元治立越たりと言入れける親子立出是いと  
 驚きしの中も娘おかよの只夢の如くと思ひ傲し夢ならば覺さず欲や此夢と起つ臥つ  
 悦びし道程とまを見えければ斯て初五郎直と奥へ通り先新左衛門夫婦の面會し是まで盡せ  
 し艱難辛苦の物語り其上段々の一禮と述べ縮緬十五卷と白銀百枚と取揃へ新左衛門の前へ  
 差出しければ夫婦の者も甚く悦び夫よてあて我等夫婦の眼邊のさりし實は天晴なる事と哉  
 とて或の感じ或の其辛苦と推察し頓て酒肴と用意し發應しければ初五郎も大いお配訂し其  
 夜の爰も宿りける斯て翌日なり初五郎新左衛門は打向ひ候て伊勢東なれば息女此方へ  
 申受べし然乍ら拙者と當時殿下伊直參れ身なれば其方より直引取と成難く因て同じ直參な  
 る松並主計を里親と定め申可と云ふ新左衛門承知しければ乃ちおろよを連れ暇乞して立出  
 夫より白坂宿の旅籠屋へ立寄り是へも厚く禮と述白銀五十枚を遣し又百姓喜助方へ行き是

へい長く世話も成しとて喜助も白銀百枚村中の者へ二百枚禮と遣ひしけるも百姓共の只々  
 惘然果逃れそ者あるも可笑かりし夫より小田原の代官へ廻り同じ禮と述頓て大阪へ立歸  
 り松並氏と里親として目出度おかよを妻と定め申中も睦敷暮しける其後年経て頃慶長三年  
 太閤伊他界となり同く五年石田三成家康公と討んとして關ヶ原も出陣し國々の軍勢變換の  
 如く大坂へ集りける

○飯沼勘平出陣の事 并池田備中守と組合最期の事

于時慶長五庚子歲大阪方よて石田治部少輔三成關東徳川家と打亡さんとして已れ首謀と  
 なり四國西國の大軍と催促し八月の下流よりして濃州大垣の城も諸軍と集ける此折折關東  
 方より家康公上杉景勝征伐として野州小山も出陣せられ既も大軍會津へ押寄んと爲時京地  
 の細作より伏見の城路去し鳥居彦右衛門元忠討死せしと注進有しかば大い驚き給ひ少將  
 秀康公と會津の押として殘し置れ伊身自ら軍と上方へと差向らる茲も飯沼勘平元治の無二  
 の忠心と云ひ殊も故太閤の伊恩を蒙ると海よりも深く山よりも高かりしかば此度の軍假令



石田の發意と雖も既に幼君秀頼公の傍爲と有る何かの以て網原へき諸軍勢と同じく大垣城  
 に出陣し天晴大功と立先君の傍恩と報ひんと思ひ關東勢も今や打掛らんと勇み居たりけり  
 折から岐阜卓中納言秀信卿もも大阪方となり木曾川と隔て東軍と支んと爲けるも大垣より援  
 兵として諸軍打出しければ飯沼勘平も河瀬左馬介杯と同じく援兵も赴きし處早東軍迎巻く  
 木曾川の流と押渡り岐阜城と只一揉と押寄しかば飯沼勘平の最前より好敵もみなど見て  
 有内も東軍の方より堤五郎兵衛大塚何某と云者進と出で堤の岐阜方なる前田半左衛門小渡  
 り合ひ大塚の同じく武市善兵衛も立向ひし堤の前田も討ると雖も武市の危く大塚も討  
 れんとと斯とたる處も武市の舍弟忠左衛門と云者馳來り矢庭も大塚を目掛めて掛るも大塚  
 是とともせせ右も支へ左も當る其内も直と入て遂も兄弟の物と見事も討果しければ此体  
 を見て岐阜勢誰一人討て出る者も無りける勘平倍祖と思ひ其首還せ我請取ん我もその大阪  
 方お名を得し飯沼勘平元治と言者なり還せ〜と呼りて鎧と小脇も抱込み駒馳寄て相對  
 ふも大塚も心得たりと駒立直し待間程なく兩人火花と散して取ひけるの忽ち大塚突伏られ

馬より挫と落たれば勘平も續いて馬より下り右手指と抜き水も溜らず首横落して立たりし  
 の天晴豪勇の者と見ゆける斯て勘平の徐々引揚んとして遙か向ひの岡と見れば武者一騎  
 扣へて在り續く兵有と雖も武具の立派なるの必定名ある勇士ならんと思ひ驍在も進んで  
 名乗懸けるが推量不違の此の池田備中守までぞ在ける備中守斯と見より同じく鎧も合せ  
 んととるも郎等の伊東與兵衛なる者勘平の前も立塞り主従りと數せ追つ巻りの戦ふと雖も  
 勘平少しも恐るゝ色なく右も衝き左も當り既も主従今の危く見たる處も池田の軍勢忽ち四  
 方より集り來り只一人の勘平を前後左右も取圍としかば勘平勇かりと雖も多勢も無勢文ふ  
 るも由なく今の早是支でと思ひ屏期の一戦見よやくと叫ひり乍ら旗り立たる池田の勢を  
 彼方へ切伏せ此方へ薙り頓て馬と一所も停め鎧も扱捨腹撞切て死たりし目覺しくも又天  
 晴なりける振舞なり勘平當年廿九歳十三の時より辛苦と盡し父の怨敵も首尾よく討ち又思  
 願の主家も忠義と盡し血氣盛りと散る花の身と爲しよと復ならん壯士と思ひれけれ

箱根權現躰仇討終

明治十八年十二月十八日 翻刻御届  
同 廿年一月三十一日 別製本御届  
同 廿年二月 出版

定價金四拾五錢

東京府平民

出版人

覺張榮三郎

日本橋區本石町貳丁目十六番地

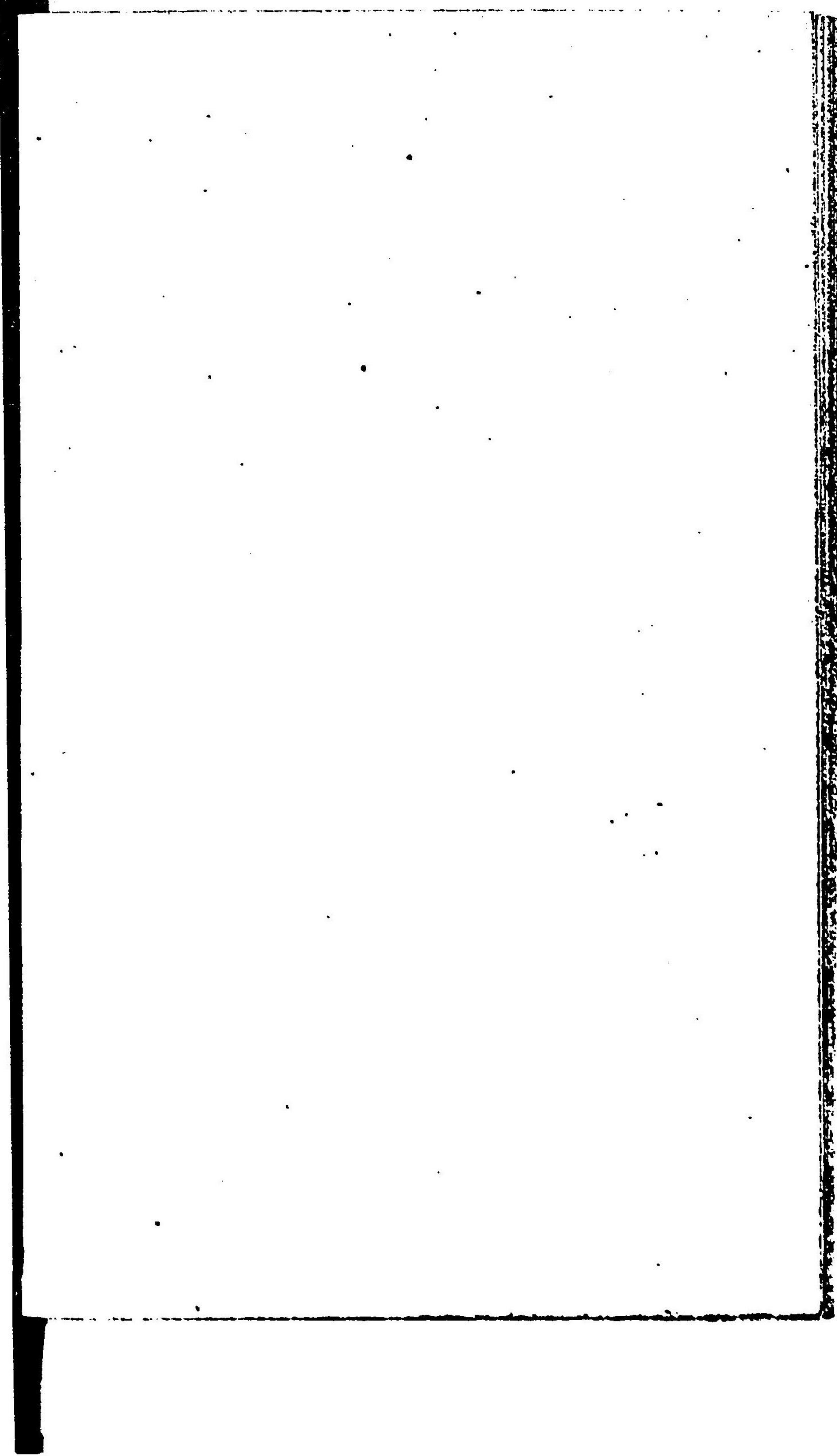
發兌元

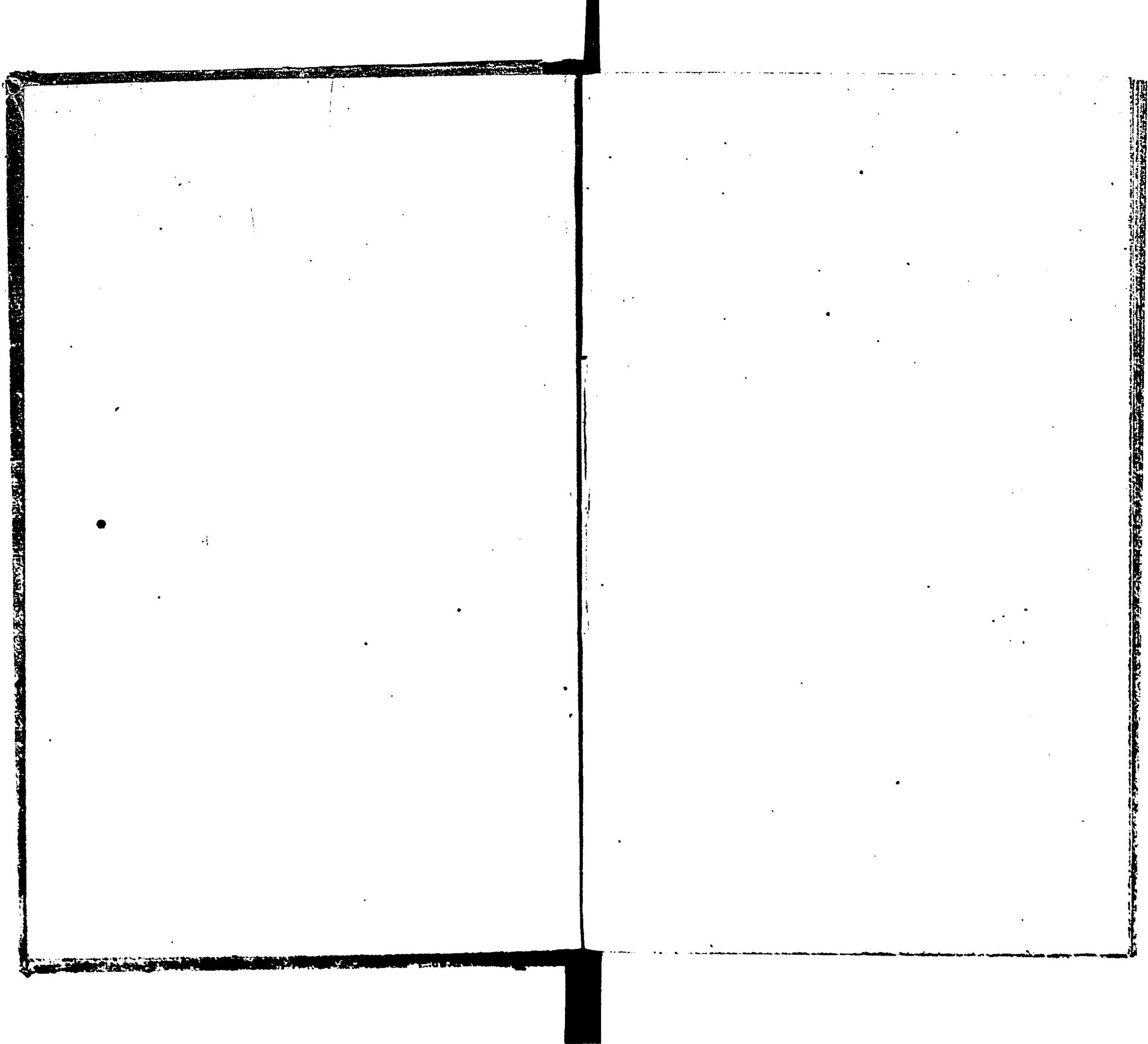
上

田

屋

同區同所









091242-000-7

特11-421

箱根権現麓仇討

上田屋

M20

DBN-2096

